

以下の記事を読み、コメントを書いて下さい (500 字以上)

「中国マッサージ」の記事では日本語も堪能で学歴も高いチェ・ホアが、お金を稼ぐということを目的に生活しなければならなくなっているということに衝撃を受けた。彼女なら面接を受ければ条件のいい会社に就職し、余裕のある生活を遅れるのではないかと思ったが、実際は厳しい現実が待っていたことに驚いた。もしかしたら景気が悪い時期だったから、というのもあるのかもしれないが、有能な人材が日本で就職できない、という現状はなんとか解決できないのだろうか。留学生だからと言って、風俗店まがいの店で働かなくてはならない状況は改善されるべきだと思われる。彼女は健全にはたらいいていても、警察や周りから風俗店だと思われかねない店の経営というのは、リスクも高く、いずれ安定しなくなる可能性もあるだろう。しかし、日本人でさえなかなか就職できない今、留学生と日本人、どちらの雇用を優先すべきか、そのバランスはとても難しいと感じる。それを考えれば、まずは母国中国の雇用を増やし、母国での就職を考えられる状況を作るのが先なのかとも思われる。彼女はあまり強く感じてはいなかったが、やはり就職に不利な民族だというのが母国での就職を足踏みさせていると読んで感じた。そのような中国の状況に改善が見られれば、彼女の生活も大きく変わることがあるかもしれない。

もうひとつこの記事を読み考えさせられたのは、お金と生活という問題である。お金は、生活する上でなくてはならないというのは誰もが知っていることであるが、しらすしらすのうちにお金のために生活しているという現象は、チェ・ホアのような外国人だけがその危険にあるわけではない。しかも、それは生きて行かねばならない事情がある以上、自分では変えられないというのが恐ろしいところである。これを解決するにはやはり、社会の周縁からめをそらさずに、支援や保証を考えていかなければならないと考える。

「ブラジル人サッカー留学生」の記事に出てくる青年は、家族のことや国の状況が関わっている面もあるだろうが、彼は人にはない特別な才能を持っている。それを活かせば日本でも難なく暮らせるのではないか。彼がやるべきことはまずアルコール中毒を治療するために療養することである。

中国人エステの話が最も興味深かったです。一つ目の理由は、読み終わった後の私の感情が他の記事の時とは違って同情心でいっぱいだったからです。前回までの記事や、ブラジルサッカー男子の記事を読んだ後は、「個人の努力の問題でこの環境から抜け出すこともできそうなのに」といった感想がすぐに出てきました。しかし、この記事を読んだ後は、「人並み以上の努力もしてもっと豊かで幸せな生活が送れるはずなのに。」と同情的な感想を覚えました。そして、この人の苦勞の根源にあるものは、やはり生まれ育った環境、貧困だと思います。お金という強迫観念にとらわれ続けてしまう、どんなに努力してもお金の不安と一生付き合わなければならない、だからやりたいこともできない。中国での心を痛めた体験から逃れ、日本という国に希望を見出しやって来たのに、結局幸せで安定した生活は送れない。近年では中国に対する日本人の感情も、一般的には良いとは言えないだろうし、彼女の今後がどうなるのか、読者の一人として気になりました。二つ目の理由は、彼女のような境遇に見舞われる人々がグローバル化の進展によって増

加するのではないかと思ったからです。昔に比べて外国で仕事をする人は増加しているし、もしかしたら彼女のように生まれ育った環境が恵まれない人々がますます自国ではなく、外国での成功を夢見るも、成功せず苦勞の生活を送ることになるかもしれません。どこに行っても貧困と向き合わなければならない、親が貧困ならば子も貧困といったループは簡単には止められないと感じました。

より興味を惹かれたのは中国マッサージ。ただ中国マッサージそのものに関心を持ったというよりは、記事に登場したママにであるかもしれない。これまで読んできた記事ではブラジル人の元サッカー留学生しかり、生活保護不正受給者しかり、ホームレスギャルしかり、何故か一様に「我慢できない」「欲にのまれる」タイプであったのに対し、このママは「我慢強い」。抜き有りの方が儲かることは承知で、しかし安定を求め健全店でやっ払いこうと奮闘している。なぜこの女性がこれほど苦勞しなくてはならないのか。今回の記事では今までになく応援したいという気持ちが強く出てきた。

そしてもう一つ気になったことは、彼女は日本に来てから決して極貧というほど金に困っていないこと、それなのに執拗に金を必要としていることである。それはビザのためであり経営のためであり故郷の暮らしのためであり、人並みに日本で暮らしていくために並みの日本人以上に苦勞して多くの金を稼がなければならない現実による。であるが、決して日本人も無関係ではない。このママのような事情がなくとも、何故か金に支配されながら生きているのではないか。生きるための金、ではなく、金のために生きる、この記事のとおり「カネの奴隷」として存在している日本人が一体どれだけいることか。

これまでのような下層の話、現実に馴染みのないエピソードだったこれまでの記事と違い、この記事では貧困でも社会の裏側でもなく、我々全体に、ほど近く、薄らと浸透している闇が見えたように感じた。

「中国マッサージ」の記事に興味を持った。

ブラジル人サッカー留学生の記事に比べて中国マッサージの記事に興味を持ったのは、前者が「想像通りで、まあそんなところだろう」という感想を抱いたのに対し、後者ではアジア系マッサージ店の看板をみるたびに疑問に感じていた「どうして外国人のお店に需要があるのか」という問いに対する答えの輪郭を掴むことができたからだ。

中国マッサージと日本の風俗産業との違いが、お客さんとスタッフとの関係の親密さだという点は興味深い。性的欲求のはけ口としてだけでなく、食事にいたり、中国語を教えてもらったりするといった「アットホーム感」が求められている事例は、性的な欲望をインスタントに消化しやすくなっている現代では、よりいっそう求められるサービスなのではないか。しかし、そういった「つながりたい」「わかりあいたい」欲求すらもお金で変える消費活の対象となっていく様子は、合理化やスピード化がもたらした空虚さを感じさせる。

また、東北の農村出身の中国人であるチェ氏がそうした「アットホーム感」の担い手となっている状況が、日本でも地方出身者がその方言と併せて、温かくて優しいイメージをもたれやすい

点との相似しているように思えて興味深かった。

三つの記事に共通していると思ったのは、どんな職業にも人柄や愛嬌、コミュニケーション能力が必要とされるということだ。コンピューター技術の発展によって、あらゆる業務が効率化されるからこそ、人の温かさや触れ合いが求められていくのだろう。

2つの記事を読んで、ブラジル人サッカー留学生の方に興味を持った。

はじめに「サッカー留学生」と聞いて、「サッカーのために日本に来たブラジル人」の話だと思いつつ読んでいた。しかし記事を読み進めていくと、日本に来たのは母親を追ってのことであり「サッカー留学生」という言葉には違和感を感じた。このようなタイトルや見出しを付けるにあたっての記事の省略方法は独特であり、インパクトが高ければ高いほど興味を惹かれて特にネット記事ではタイトルによって読者数が変わると言っても過言ではない。だからといってインパクトを重視すると、記事そのものに対する誤解や、場合によっては間違っただけを書き捨てるケースもある。今回のタイトルは重大なミスリードを誘うものではないが、希望に満ちた「サッカー留学生」という言葉と「消えた」という不穏な空気のものを並べてギャップを狙っているように思える。このような記事のタイトルを考えている時に、開沼さん自身はどのような考えで・どのようなことに注意しているのかをぜひ伺いたい。

クリスチャンさんが部活で辛い経験をしたものわかるが、母親に甘えすぎているのも事実であると思う。「母親に迷惑かけないように」というようなことを彼は考えなかったのだろうか。私のバイト先にいる留学生も含む外国人労働者は、それぞれがきちんと自分のやるべきことに責任を持っている。家族を養うため、勉学を続けるために（時には正社員の日本人以上に）きちんと仕事をしているのだ。それはそれぞれの生きる目的のためである。彼らのことを私は純粋に尊敬している。しかし、クリスチャンさんの行動原理は感情に基づくものばかりである。一時的に「成功したい」と思っても、それも感情である。「会いたい」と願った母親に対しても「支える」「助ける」といった考えはあまりないようだ。彼は何を支えに生きているのかが見えなかった。

私は「中国マッサージ」に関する記事により興味を持った。

今回の記事は二つともスポーツや勉学に長けた「留学生」についてであるという点で共通しているが、特に「中国マッサージ」の記事は、繁華街にある中国式マッサージ店が身近であったことで、よりリアルな感覚で読むことが出来た。私は恥ずかしながら中国式や台湾式マッサージと性風俗を結び付けて考えたことはなかったのであるが、日本ではエリートとされてもおかしくない成績を持つチェ・ホアが、金稼ぎ(それも両親や兄弟)のためにそのような店を開くということは、日本人にとってはなかなか考えられないことだ。日本がどれだけ経済的、物的に豊かな国であるかを思い知らされたような気分になった。

そして、「中国マッサージ」に客としてやってくる人々の言葉もまた、私の想像しうるところからかけ離れたものであったことも、興味を持った理由としてある。私は女性なので、日本の性風俗事情について詳しくないという背景もあるかもしれないが、男性が(決して性的なものだけではない)コミュニケーションを求めて風俗店に行くという事実と、いまの日本に少なくなってきた

いるものの関連性をとらえたことに面白さを感じた。

「中国マッサージ」の記事が印象に残った。

一つ目の理由は、この記事が高学歴で一般社会でも十分に通用しうる能力を持った女性に焦点を当てているというだ。今まで読んできた記事では、社会に順応にするにあたって何らかの問題を抱えている人々が取り上げられていることが多かったように思う。しかし今回の記事で取り上げられた女性は、語学的能力も兼ね備え、更に実務経験もある。客観的に考えると、転職を繰り返し中途半端な生活をしているような日本人を雇うより、彼女を雇った方が遥かに将来性があるように感ずる。それでも彼女がいわゆる表の社会に自分の居場所を見つけることができなかった理由——それは彼女自身の問題でもあるかもしれないが、そこには確かに日本社会の闇が存在するのではないか。グローバル化が進んでも、私たちの心のどこかには未だに外国人に対する先入観が残っている。日本の伝統的な「おもてなし」文化や目には見えない縦社会制度ゆえに、ただでさえ外国の人々が日本社会に順応するのは簡単なことではない。しかしそれに加えて日本社会の時代に対する固さは今も顕著であり、そしてここに存在する闇は、社会全体の問題というより確かに私たち一人ひとりの心の中にも存在する闇であるように思う。

二つ目の理由は、「中国マッサージ」の店舗に対する警察の対応に些かの疑問を感じたからである。確かに社会の倫理観や規範といった面から見たら、中国マッサージのお店を一概に正当化することはできないだろう。しかしそのような店舗が生み出されることとなった原因は、やはり外国人労働に対する厳しい見方と、それらの店舗を必要とする人々が存在する日本という国にある。あくまでも合法的に行われている範囲であるならば、警察が執拗に近づくことは彼女たちから「ようやく見つけた生活の場」を奪い取ることに他ならない。それは本当に正しいことなのだろうか。少なくともこのような現実を生み出した要因の一つは私たち側にもあるのだから、「違法」を黙認しろという意味ではないが、もう少し柔軟い考え方も今の日本には必要なのかもしれない、と個人的には感じた。これは社会全体で対応していくべく問題であると思う。

以上の理由から私は「中国マッサージ」の記事に強い印象を持った。

私は「中国マッサージ」の記事に興味を持った。

最も興味を引かれた点は、中国マッサージで働く人々や、仕組みそのものではなく、「中国マッサージ」が人を集める理由だった。記事によれば、日本の風俗店よりも「アットホームで自然なコミュニケーション」があることが魅力らしい。他の記事の話になるが、スカウトマンの記事の中にも、援助交際が人気の理由として、ビジネスではないつながりを感じられるということが挙げられていた。風俗は利用する人間の奥深い部分と密接に絡んでいる。人間関係が希薄と言われる現代で、また同時につながりが求められていることなのだろう。それはコミュニティを求めると同じだろうか、などと考えた。

次に興味を引かれた点は、主人公であるチェ・ホアがお金の呪縛から解き放たれないという点だ。貧しい家庭で生まれ育った彼女は、日本に出てきてからも、とにかく働いてお金を得ることに執着している。「強迫観念のようなもの」と彼女は語るが、彼女に限らず、一度水商売をして

しまったら、もう普通の仕事には就けないのではないのかと私は思う。道徳的なものというより、金銭感覚が狂ってしまうのではないだろうか。彼女の場合はそのような理由よりも、「強迫観念」によって働き続けているのだと思うが、以前授業で「友達が風俗をしようとしていたら止めるかどうか」の話が出た時も、そのように思った。

私はこの二つの記事を読み、「ブラジル人サッカー留学生」をテーマにした記事に興味を持った。

私がこの記事に興味を持ったまず第一の理由は、記事中でクリスチャンが来日して一番最初に所属した高校でのスポーツ留学生という制度のあり方に疑問を持ったからだ。クリスチャンが退学後に夜の世界で成り上がる夢を見ながら自堕落な生活を送る事になった一番の原因はクリスチャン本人にあり全てのスポーツ留学生がそうだと決して言えないが、どうしても私はこのスポーツ留学生としての期間がクリスチャンの転落の原因の一端に思えてならない。

まだ大人になり切れていない若者が、人格よりもアスリートとしての資質に重きを置いた試験で選抜され、右も左もわからぬ異国の地で慣れない生活を送り、プロ同様に「結果」を求められる。このような制度ではクリスチャンのような「脱落者」が生まれるのも仕方がない。

もう一つこの記事を読み感じた事がある。それは日本の「夢を掴みたい移民達」の受け皿としての限界だ。かつての日本やブラジルがそうだったように経済が急激な発展を遂げることができれば、市場の規模とそれまでの労働力とのギャップに移民たちが入り込む余地がある。しかし今の日本は豊かではあれど大きな伸びしろがあるわけではない。このような状況で移住する若者が、成長よりも安定が先行する今の日本で人知れず夜の世界へと埋もれて行ってしまうのはある意味で自然な事なのかもしれないと感じた。

私は中国マッサージの記事に興味を持った。その理由としてこれから 2 つ述べるが、その理由のどちらともマッサージと留学生の 2 つの記事を読み比べて、論理的にこちらの方がよかったという理由ではなく、私が単純にいいと思ったから選んだということ的前提としたい。

①「豊かで幸せな生活」を夢見て日本に来る外国人に待ち構える「現状」がこの記事には直接的には書いていないが、読み取れるため。

私が知っている限り、日本に来る外国人（主に途上国）は皆、何らかしらの日本に対する「憧れ」を抱いて来日している。そのバックグラウンドは様々だ。彼らは、「豊かで幸せな生活」を得るためにまずは職探しをする。「グローバル化」が叫ばれ、日本人であろうが外国人であろうが能力があればどんな会社でも機会はある時代になっているはずである。そう。はず。だが、現実には厳しい。記事の中では、主人公は日本における就職活動はそんなに熱心ではなかったことが読み取れる。しかし、仮に彼女が相当就職活動に力を入れたとしても、彼女が望むような企業に入り、職に就くのはかなり厳しいと私は思う。

「外国人を募集している企業」は日本にはたくさんある。しかし、企業の本音は「日本人>越えられない壁>帰化外国人>永住権持ち外国人>普通の外国人」なのである。

主人公の本国である中国人の場合は、確かにここ最近需要が大きく高まっている。一見すると、

外国人の登用も盛んになっていくのではないかと普通は思うだろう。しかし、日本人にも中国語を堪能に操れる人も需要の増大と同様に増えているわけで、そういう人がいるなら、わざわざ中国人を雇う必要がない。記事に書いてある通り、よほど抜きん出た才能がない限りは。その抜きん出た才能でさえ、日本では探せば必ず見つかる。日本の企業が日本人を雇う、外国人を避ける傾向があるのは当たり前だが、何よりも外国人を雇うということは、その雇用を維持するためにかなりの労力が必要である。帰化して日本人になった外国人はそこまで問題はないが、いわゆる日本に「夢を持って」来日している外国人はほとんど永住権を持っていない。永住権を取るためには、厳しい素行調査、日本での労働実績、日本での在住年数が問われ、至難の業である。永住権を持っていないと、数年ごとにビザを延長することになっており、その手続きは煩雑この上なく、数日休みを取らなければいけないほどで、さらにその延長も必ずしも認められるわけではない。つまり、業務に支障をきたす上に、突如日本にいれなくなるという大きなリスクが生まれてしまうのだ。さらに、永住権を持っていても、ビザの延長などはないものの、外国人は外国人なのでそれなりの制限が付きまとうことになる。ここまでして外国人を雇うメリットがないというのが現在の日本の多くの企業の本音である。実際、外国人歓迎と採用要項などに書いてあっても、実績はゼロという会社がほとんどである。他にもたくさんあるが、こういう「現状」が「豊かで幸せな生活」を求めて来日した外国人にふりかかり、彼らの多くはその現実を目の当たりにし、そのほとんどは折れてしまう。だから、記事の主人公が仮に本気で就職活動に取り組んだとしても、彼女が望んだような生活ができる可能性は低く、記事のような仕事に就く可能性はかなり高いと私は思う。

②私自身、外国籍の人間であり、この記事の話は現実的に身近な話であるから。

同年代や先輩外国籍の人は皆就職活動をしていると、外国人はエントリーシートの段階で落とされると嘆いていた。とある台湾人の先輩は、世界進出に余念がないグローバル化最先端の超大手企業OB訪問などに行った際に、「グローバルと言っても、まずは日本語力をはじめとする「日本力」を付けなければ話にならない」と言われ、「こんなにグローバル化を謳っている会社がこう言うとは思わなかったよ」と落ち込んでいたのが印象的だった。会社が求めている「日本力」というのは、言わずもがな「日本人になれ」ということと同意味だ。遠まわしに「日本人以外は要らない」と言っているようなものである。

日本で思うような職に就けなかった彼らは結局、国に帰るか、同族相手に商売をするか、アルバイトをして細々と暮らしていくか、ハイリスクハイリターンの仕事に手を染めるしかないのである。少なくとも私が知っている外国人はほぼ全員が先述のパターンのどれかに当てはまる。先述した台湾人の先輩は結局台湾に帰国したし、知り合いの外国籍のほとんどは街の中心で細々とスナックや食堂を営んでいたり、「ネオンサインがきらきらしている」業界に入っている。

わたしは中国マッサージの方により興味を持った。

理由の一つ目は高学歴＝豊かさに直結するわけではないという現実を突きつけられたからだ。文章中のチェ・ホアは日本語検定の一級にも合格し、その他二か国の言葉を操るトリリンガルで

ある。大学にも通った経験があり学歴がないわけでもない。しかし、家が貧しいため労働に次ぐ労働を強いられ、将来像をきちんと描くことのなかった彼女は就職活動に失敗している。家庭の経済状況がその後の彼女の人生に大きく影響を与えているのだ。いくら現状から這い上がろうとしても始めに生まれた環境が彼女をいつまでも縛り続けているということに残酷さを感じた。

二つ目の理由はチェ・ホアが「グレーゾーン」にこだわって商売をしているということが挙げられる。ここに「グレーゾーン」の本質を見たような気がしたのだ。「グレーゾーン」は一番安定的に商売の利益を上げることができる場所なのだ。つまり、彼女のように貧窮しながらも「真っ当に」生きていこうとする者たちの最後の砦なのだと思う。客の側としても、完全に黒ではないけれど白でもない、「ちょっと悪いけれど、まだ大丈夫なこと」に惹かれて集まってくるのだらうと推測した。

以上、二つの理由から、私は中国マッサージの記事に興味を持った。

私は「ブラジル人サッカー留学生」に関する記事により関心を持ちました。理由の一つとしては、私自身は男であり、「中国人マッサージ」での記事は日本でこういう文化的事象が存在しているという事実はきちんと認識する必要があると思うが、なによりも対象が女性であり、自分からかけ離れた偽造結婚や子ども、エステママ、社長の愛人など女性ならではの葛藤のようなものに対する要素が含まれるものよりは、「ブラジル人サッカー留学生」の酒とカネに関する話題の方が身近に感じたからです。

さらにもう一つの理由は、自分の中に外国人留学生に関する多少似た体験があり、その体験を思い出したからである。私は大学1年次に渋谷の飲食店のキッチンで1年近くアルバイトをしていたが、日本人は私を含めて3人しかおらず、そのほかはベトナム人2人と中国人2人でした。私はその一人のベトナム人に料理のノウハウを教えてもらいました。彼は体育会系で料理のスピードと計算力はぐんを抜いてましたが、いきなりクビになり、ベトナムに帰ったらしいです。クビの理由は欠勤やビザもかかわったらしいのですが **facebook** も友達からいなくなり、わかりません。彼が普段は明るく職場に活気をもたらす存在だったことなどもクリスチャンと重なりました。クリスチャンのキャバクラ店員やどの超えた酒癖の悪さなどとはまた違うのかもしれませんが、実際に外人独特の人懐っこさを体験しているだけに「ブラジル人留学生」の記事は興味深かったです。

中国エステの店は私の地元にもあるが、漠然とした怪しげなイメージがあるだけで、その詳細は知らなかった。現在日本は大量の外国人を受け入れており、外国人のいる日常は当たり前となっている。日本を訪れる外国人の目的は様々だと思うが、自国の生活水準の低い国では「カネ」を稼ぐことを目的に来日するものも多いだろう。こうした現状を思い返したとき、私がこの記事に興味を持ったのは、「中国人エステ」や「フィリピンパブ」のように外国人が多く働く店がなぜ人気になるのかということと考えたとき、それはやはり従業員たちの「ビジネス」だけでないコミュニケーションを求めているからなのではないか、と思ったためである。現代の日本では、あらゆることが有料サービスで行われる。そこに存在するのは「ビジネス」であり、「コミュニケ

ーション」とは言えないことが多い。そんな中、男性たちは外国人女性との「コミュニケーション」をも含めたサービスを求めて来店するのだろう。ここに今の日本は物理的な豊かさは達成できているものの、精神的な豊かさが失われつつあるという現実を見るのが出来、このことは非常に興味深かった。また、客へのサービスを提供し、癒しの場となってきた中国エステがグレーゾーンとして規制が強まっている。このことはそこで働く外国人女性だけではなく、癒しや安らぎを求めてやってくる現代日本人男性にとっても大きな打撃となるのではないだろうか。そう思うと、現状についてもっと知りたいと思ったので、この記事についての意見を述べさせてもらった。

私が興味を持ったのは「中国マッサージ」の記事の方です。一つ目の理由としては、中国人留学生の彼女の方が私にとって身近な存在であったからです。早稲田大学にも多くの中国人や韓国人の留学生がいて、飲食店でも店員として働いている留学生の方をよく見かけます。そんな数多くいる留学生の中の一人だったであろう彼女の話は大変興味深かったです。

また、二つ目の理由は彼女の生きざまの方がブラジル人留学生のそれに比べて考えさせられることが多かったからです。後者の話は、私としては特別物珍しくもない話という印象を受けました。ただ彼がブラジル人だという点を除けばよくある話のように思えたからです。それに、彼が日本に来た理由も日本の学校側が呼び寄せたのではなく母親に会いたかったからというものであるし、彼が人生を踏み外してしまったのも彼自身の責任によるところが大きいと思いました。なので「スポーツ留学生」という制度をはじめ日本社会の問題点などをうかがい知ることもできず、あまり何か考えさせられるような記事ではなかったです。一方の中国人留学生の記事の方は、自己責任な部分も多いとは思いますが貧しい家庭から日本に来た留学生の金銭的な問題など、社会的な要因によって彼女が望んでいない人生になっていった側面もありますし、日本に多く存在して、普段は気にも留めない外国人留学生について考えるきっかけとなりました。彼女が「安定した生活」をずっと求めながらもだんだんとそれから離れていく様子も皮肉で興味深い内容でした。

ブラジル人サッカー留学生であった男性は酒や暴力など国籍どうこうの問題ではないところでつまづいていると感じた。一方、中国マッサージ店を営む女性は「カネの奴隷」となりながらも必死に社会に食らいついていて興味を持った。

記事を読んだときの一番の驚きは彼女の学歴だった。それこそ高田馬場でもたくさんの客引きの女性を見かけるが、日本語が不自然なことから教育を受けることができない貧しい人々、というイメージが染み付いていた。しかし実際には、博士号を取得し言語にも不自由のない外国人でさえも就職難で単純労働や裏の社会で生きることを強いられている。なぜ、熱意も能力もある(日本人の若者よりもあるといっても過言でないのでは)彼女が就職することが出来ないのか。そのことに強い疑問を抱いた。

「個人的な偽装結婚」は初めて耳にしたが金の代わりに心を売るようなかなり痛烈な選択だと思う。外国人労働者の増加に伴いそのトラブルの数も増えている。しかし、それゆえビザ取得の



困難から彼女らの人権までもが低く扱われている（自ら低くするしかない）のはどうなのかと思った。しかし、偽装結婚は仲介に詐欺グループが関わっていて日本人側が被害者になるケースもあり、一概に外国人をかばうことはできない。このように善悪が紙一重で反転しうることも、この問題の解決を遠ざけてしまっているのではないかと思った。

#### 「中国マッサージ」

中国マッサージ店の女性チェ・ホア（仮名）は、その生涯にわたり「豊かで幸せな生活」を追い求め、またその呪縛から逃れられずに生きてきた。高校卒業後は中国の「国家重点大学」に推薦入学、教師やアパレル企業といった職についた後、日本の大学院へ入学するなどその経歴を見るだけでも、彼女が優秀である様子がうかがえる。しかし現在彼女は日本で暮らし、中国マッサージ店を経営するママとしての道を歩んでいる。

「中国マッサージ店」というものや、片言で道行く男性を誘う外国人女性の姿はもはや見慣れた光景であろう。そのためか、私はこの文章を読んで心底驚いた。なぜなら、こうした"準風俗店"（正直そうした店を利用したことのない人間にとっては本番であろうとなかろうと"風俗店"なのだが）に関わるような人には、チェ・ホアのように優秀な人間がいるものとは思わなかったためである。そして彼女の生き立ちを知るにつれ、彼女はただ「豊かで幸せな生活」を追い求めているだけなのに、何故「カネ」の影がついて回ってしまうのだろう、と、かわいそうにも思った。

しかしここでふと疑問が立ち起こる。なぜ私は優秀な中国マッサージ店のママに驚くのだろうか？そこでカネを稼ぐのは果たしていけないことだろうか？例えば彼女が IT 企業の社長であったとすれば、この記事はどうなるのだろうか。そもそも開沼先生が記事の対象として扱わないという話は置いておき、少なくとも「カネの奴隷」といった書かれ方はしないのではないだろうか。最低月収が 100 万円、地元中国に 1500 万円のマンションを買い、極貧の過去を乗り越え両親や自らの幸せ・安定のために働き続ける中国人女社長とは、なんと立派な姿であろう。同じことが書かれていても、準風俗店のママだからと偏見の対象となっているのではないだろうか。

彼女は「ただ単に稼げるから」という理由で準風俗店を経営しているようには見えない。その証拠に、中国で働いていた際に社長の愛人とはなり続けなかったし、自分の能力を考慮した上で「向いている」と思ったためにこの業界に足を踏み入れたという記述もなされていた。仕事を選ぶ上で「適材適所」という言い方はよくなされている。彼女もそうしてこの仕事を選んだはずなのに、余計な偏見がついてしまっているのではないだろうか。この記事を読むことで、自分自身の色眼鏡に気づかされたように思った。

田中マルクス闘莉王(以下、闘莉王)と三都主アレサンドロ、いずれもサッカー留学生としてブラジルからやってきたサッカー選手であり、その後日本に帰化しワールドカップにも出場するなど日本を代表する選手とまでなった。私はこの記事の見出しを見て、この二人の選手がすぐに頭に浮かんだ。しかし、彼らはブラジル人サッカー留学生の「光」の部分であり、本記事で取り上げ

られているクリスチャンは「闇」の部分である。

闘莉王に関しては私自身特に応援している選手であり来歴などもそれなりに知っているが、彼も同様に日本の生活に馴染めず苦勞したそうである。とはいえ、ドロップアウトせずにプロの道へと進んだのだが。このように一般的に知られているサッカー留学生はいずれも「光」の部分に限られてしまい、問題点もえてして苦勞話、美談として片付けられがちになってしまう。そのため、私はサッカー留学生の「闇」を知らなかった(知り得なかった)し、サッカー留学生というものが外国人労働、移民といった問題に直結するというところに自己の認識に甘さを痛感した。

スポーツの留学生はサッカーだけではなく大学駅伝のアフリカ留学生やバスケットボールなどにも見られる。そのスポーツでプロになることができれば生活にも困ることはなさそうだが、そこから零れ落ち、なおかつ日本に留まる外国人の雇用の保障などが必要になるかもしれない。そうすると日本人の非正規雇用者の問題とも関わる可能性も無きにしも非ずではないか。スポーツと冠しているから一見軽そうに聞こえるこの問題は意外と根深くなるのかもしれない。

私は「中国マッサージ」のほうに興味を持った。理由は2つのギャップにある。1つ目は、中国の貧しい農村出身でありながら日本の大学院を卒業できるほどの「賢さ」に恵まれているにも関わらず中国マッサージ店の経営者に身を落としているというギャップで、2つ目は彼女の言う「豊かで幸せな生活」と、現実の中国マッサージ店のギャップだ。2つのギャップを生んだ要因は、幼いころの貧しい生活で培われたお金への強迫観念だろう。がむしゃらに働いて、今すぐ最大限の金を得たい。いわゆる「金の亡者」だ。そして多く稼ぐことだけが人生の目標になり、日本での就職活動では将来の展望など何一つ浮かばなかった。さらに現在の彼女の人生はというと、偽装結婚で愛のない形だけの家庭を構えるなど空虚だ。彼女は頭がよく、接客やマッサージの技術は一流だ。堅気の職でもコツコツ続けていけばそれなりに稼げただろうが、そのような地道な人生はいつ軌道に乗るのか先がみえないことも確かで、今すぐお金がほしい彼女は焦りからすぐに手放してしまったであろう。だが、中国マッサージ店経営も結局は警察の摘発、客の横暴、やくざとの抗争におびえる先の見えない毎日になる。そのことを彼女自身は気づいていない。

私は「中国マッサージ」に興味を持った。

1つ目の理由は、中国人にかかわらず、「性的なサービス」を提供する店が儲かり、台頭していることに疑問を持ったからである。実際に年間どのくらいの店が警察による摘発を受けているのかはわからないが、このような店が減少しているようには全く思えない。彼女は「中国人マッサージ」の店舗がほとんどない地域に出店したと記述されているが、もし私がこの地域に住んでいたとすればいい気はしない。グレーなサービスを提供する店に退去を命じるオーナーの気持ちもわかる。「性的サービス」を提供する店が世の中の的に排除される傾向にありつつも、実際はそれが進んでいるのかどうか定かではなく、日本人のみならず外国人が手を出し始めることで、これから先收拾がつかなくなり、グレーゾーンは更に深まっていくのであろう。

2つ目の理由は留学制度である。彼女のような人をこれ以上増やさないためには、日本でどうこうという前に、自国で何か手を打つことが大事だと感じたが、それもそうとはいかない。外国か

ら優秀な人材を受け入れるために留学制度を作ることは大いに結構である。それが転じて可動化は分からないが、違法入国する外国人を受け入れ、自国にグレーゾーンを新たに作ってしまうのならば本末転倒である。決して外国人を受け入れるな、と言っているわけではない。自国内で解決することの出来ないグレーゾーンが多数あるにもかかわらず、さらに解決の難しい国を跨いだ問題を形成してしまうことが問題であると考える。

どちらのテーマもインパクトがあり非常に考えさせられる内容であったが、私は2つ目の「サッカー留学生」に関する記事に興味を持った。その理由の1つ目に、彼がお酒を飲むことから逃れられない理由が気になった。そして2つ目に、彼がこの負のスパイラルから抜け出す為にはどうすれば良いのかという点に興味をもった。お酒を飲みすぎ事件を起こさなければ、成功するであろう場面は幾度となくあった。しかし、彼はそのチャンスを自らの手で手放した。一番そのことを自覚しているのは彼自身だと思う。彼をお酒に駆り立てているのは一体何だろうか。お酒の持つ快楽性と自分自身への不安、嫌悪感。一時の快楽のためにお酒を口にし、我に返り、猛省する。私は、彼がお酒をやめられない理由は、何度繰り返しても、誰かが自分を助けてくれるだろう、という甘えが深層にあるからだと思う。両親が日本に旅立った際も、結局は自分を日本に呼びつけてくれ、お店を何度クビになっても手を差し伸べてくれる人がいた。「最後はなんとかなるだろう」という思いが心の奥に常にあるのだと思う。彼のチャームポイントである「人懐っこさ」が彼の甘えを断ち切るあしかせになってしまっている。彼の自慢のルックスも年と共に廃れつつある。そろそろ誰も手を貸してくれなくなる。そのことに早く気付いて、本気を出して欲しい。

あえて二つの記事に共通点を見出すとすれば、それは理想と与えられた条件のギャップに引き裂かれる人間たち、ということになるだろう。チェ・ホアもセバスチャンも、前者は「豊かで幸せな生活」を夢見ながら所与の条件として与えられた貧しさのために「金の奴隷」として生きていくしかないという点において、後者は「日本での成功」を夢見ながらもアルコール依存症という条件のために「幸せな物語」に幕を下ろさざるをえないという点において通底するものがあるのだ。それでもチェ・ホアの場合は所与の条件のために、本人の優秀さ、努力の数々にも関わらず金に振り回され続けるという悲劇性、言い換えるならば被害者性があるのに対してセバスチャンの方は自業自得の感が強くないともいえない。私事ではあるが、元恋人が学費のためにキャバクラで働いていたという身としてはチェ・ホアに対する、憐みのような情を抑えることができなかった。それでも、私はセバスチャンの方に興味を持ったのだ。

現代の学生にとって、チェ・ホアは他人とは思えない。彼女ほどではないとはいえ、大学の授業料の高騰や大学生の親の平均年収の低下によって多くの大学生は水商売や労働基準法無視のアルバイトに勤しみ、程度の違いこそあれ貧困を感じている。私自身、半年前まで週五日八時間のバイトをこなしながら大学に通っていた。だからこそ、奇妙な比喩ではあるが多くの大学生は「貧困」の旗印の下に憐みのネットワークを持って団結することができるだろう。ではセバスチャンの例はどうか？はたから見れば、彼は酒で自らの人生を破壊するアルコール依存症患者であり、彼に対して憐みを感じることは容易ではないだろう。それでもブラジルに帰国するまでの数

年間、彼は日本の「裏の世界」で生き続けた。なぜ生き続けることができたのか？ひとえに、彼の人格や人間としての魅力によるのだろうが、その魅力をもってしても彼は表の世界の落伍者である。幾度の失敗にもかかわらず彼を生かし続ける「裏の世界」というのは、まさに表の世界における(憐みのネットワークにも入っていけないような)落伍者のための場所なのかもしれない。すると、「裏の世界」の非合法さにかかわらず、必要悪ともいえる側面が見えてくる。これがセバスチャンの記事に興味深いと思った第一の理由だ。

表の世界では憐みすら感じられないような落伍者のための「裏の世界」—このように語ると、「裏の世界」の寛容さのようなものが見えてくる。再就職や非新卒の就職の厳しさが叫ばれる現代において、「表の世界」から外れてしまった人間はどうやって生きればよいのだろうか？セバスチャンほどではないとはいえ、彼と同じように今の環境(一見成功に見えるかもしれない環境)を投げ捨ててしまいたいと思う人間もいるのではないだろうか？しかし、そのような人間の受け皿は、果たしてこの世界にあるのだろうか？そのような問いを喚起させられたのが、興味を持った第二の理由である。

今回、「中国マッサージ」と「ブラジル人サッカー留学生」の記事を読み、私は「ブラジル人サッカー留学生」の記事に興味を抱きました。理由は以下の二点である。

まず一点目は、「中国マッサージ」の女性は目的・夢を持ちどちらかと言えば志高く日本へやってきた印象に比べ、「ブラジル人サッカー留学生」の男性は自分の欲求を満たす為に日本へやってきた印象を得たからである。両者はかなり対局な位置におり、自らの人生を導いているかいないかでの大きな違いを感じた。その上で私は生きるために生きているこの男性自身に興味を抱いてしまったのだ。この男性は日本に来ていなければもっと違う生活をしていただろうし、もっと荒れた生活をする事で悪質な犯罪に手をそめてしまっていたかもしれない。そう考えると生活する環境の多大なる影響を感じる。

次に二点目はこの男性にはサッカーという武器があったからである。この男性は特殊な能力を持っていたわけではないし、特別何かを努力したわけでもない。しかし、人よりすこしだけ、日本人より少しだけサッカーがうまくできた。少しだけ可愛がってもらえた。これを強みとしなんとか生きていくことができた。しかしこれは日本人が日本で暮らすのではありえないことであろう。特別な環境下であるから受け入れられることはあるのだなと感じた。

特に興味を持ったのは、「中国マッサージ」の記事である。

一つ目の理由は、「漂白」の裏側には「夢」があることである。「中国マッサージ」の記事は、「激安シェアハウス」の問題のように、そもそも線引きの難しい問題である。いずれも「夢」を追いかける姿を応援したくなる、しかしその夢を実現しようとする過程で気づけば日本社会の闇に囚われて、その闇もろとも「漂白」される。今回の記事で感じたことは、漂白は日本社会のメインストリーム、「一般的」な側からみたときに彼らの存在に対して行われるものであって、すでに日本の下層に落ちてしまった人々や日本よりも発展の後れた国から見た時には、「夢」や「希望」が標榜されている。ゆえに、もしかしたら、「漂白」していることの実実にあまり危機感を抱か

ない日本人も多いのかもしれない。

二つ目の理由としては、問題の広さである。「漂白」される対象になってしまった側を描き出しているのが今回の記事であった。しかし、問題の現実の全貌をとらえようとするならもっと広く考える必要がある。同じような境遇の中から実際に大成功している中国人や、大成功までいかずとも一般的な日本人と同様の暮らしをしている中国・朝鮮人もいるかもしれない。普通の留学生もたくさんいる。彼らが特別、頑張らなくてもうまくできている恵まれた環境にいと決めつけることはできない。また、問題の原因を考えれば、彼らの出自国と日本の文化や経済レベルの違いというマクロな視点から、彼らの自己責任、心理的問題というミクロな視点までであるだろう。

「夢」を追いかけているのだから問題はなくそれぞれが頑張ればいいという意見から、彼らが普通の日本人と平等に同等の機会を持ち得ていないことが問題であるという積極的に包括を目指す意見までであるだろう。

筆者が語ろうとしている「漂白」の問題の全体像の中には、「中国マッサージ」の記事のように、「漂白」しきれていないけどもその可能性のあるものを入れて語らなければ、「漂白」についての問題提起としては不完全なのかもしれない。なぜなら、「漂白」の問題を語る時に白黒ついた問題、つまり黒なはずなのに白で塗りつぶされた問題だけを語ることは、それらを改めてメタ的に「実は黒でした」と認識させて終わってしまうからである。「漂白」問題の本質は、我々の身近にあって同じ世界でつながっていて我々が直接的に経験できる問題であるにもかかわらず、白黒つけて、白や黒の中に細かな繊細な視点を葬り去ることにある。そうであるならば、「漂白」について語るなかで「黒なのに白」の問題だけを語っては、結局「黒」を描き出したに過ぎない。重要な問題提起として、白黒ついていない問題を前にして、我々はまだこれからもこれらの問題に対して「漂白」を続けますか？それとも別の道はありますか？という問題提起が必要なのであろう。センセーショナルで刺激的なアングラ的な一幕を見せて終わりにするのは、一時的なショーであり、暇つぶしであり、さらには漂白の強化につながりかねない。我々は、判断できない問題とどう向き合うかを通して、今までに漂白してきてしまったものを改めて見返す必要がある。

テーマ：ブラジル人サッカー留学生

理由

プラスの側面で謳われることが多いグローバル化にこのような面があることに衝撃を受けました。私の中で、日本へ来てスポーツをする人というのは、母国でも秀でた才能を持っていて、お金も持っているというステレオタイプがありました。しかし貧しい生活を送っていてやっつけの思いで日本へやって来る外国人が多いことを知り衝撃を受けたのが 1 つ目の理由です。中国人エステの問題もその点は同じですが「サッカー留学生」という、メディアでもてはやされ成功の途を辿っていくような人がこのような影を持っているという点がより興味を持った理由です。2 つ目の理由として、実際にこのような経歴を持ち、機会も多く得ながら毎回酒でダメにしてしまうということに社会の闇というか、そのような点を感じたからです。酒にすがってダメにしてしまうこと自体は非難されることですがそのようなことがあってもまた仕事を得ることができて

しまう日本の社会にも問題があるのではないかと思います。どこかで更生する機会を与えなければずっとループしてしまうだろうし、実際に彼もそうであったのだと思います。このような人を排除する風潮がある一方で受け入れる場もあることで、社会が矛盾を抱えているのではないかと思います。

私がより興味を持ったのは「中国マッサージ」の記事である。繁華街を歩けば中国マッサージの看板を簡単に見つけることができ、存在を認識はしていたものの、その実態を少しでも知ることは今まで全く無かったからだ。私の中ではいわゆる“出稼ぎ外国人による風俗”のイメージが先行していたが、中国エステには完全に違法である風俗エステだけではなく健全店もまた存在することを知り、コミュニケーションに重きを置くという男性心理を突いた営業戦略に感心した。チェ・ホアは自らをお金の奴隷だと言っているが、誰もが「豊かで幸せな生活」と「カネの奴隷」との天秤の上で生きているのだろう。その天秤の大きさが各個人でそれぞれ異なるだけである。しかしながら記事にも書かれている彼女の生い立ちを考えると、その言葉の意味も重さを持つように感じられた。またいくらお金のためとは言え、規制強化や競争激化の中で生き残るために店の運営に創意工夫を重ねる姿は、一経営者として見習われるべきであるように思われる。「あつてはならない」とされる世界は必ずしもマイナスの要素だけで埋め尽くされているわけではないということが窺えた記事であった。

もう一方の「ブラジル人サッカー留学生」の記事も興味深かったが、クリスチャンが“なぜ自ら幸せな物語に幕を下ろしてしまうのか”という点は、私たち第三者が言葉や理屈で理解あるいは表現できるものではないと感じられたため、今回は中国マッサージの記事を選択した。父親の影響や異国での慣れない生活のストレス等、理由と思わしきものを挙げることは容易だが、果たしてそこから彼の負のループとの関係性を見出すことは本当にできるだろうか。以前扱ったホームレスギャルの例と同様に自己責任という見方もできる。傍目から見たら彼の生き方は非常にもつたいなく感じてしまうが、ここまでの例はなくとも、私たち自身や周りの人物にも同様の経験があるのではないか。同じことをなぜ繰り返してしまうのか、案外理由があるようでいて実は無いのかもしれない。原因も解決策も、本人の意思がわからない以上どのようにアプローチすれば良いのか考えが及ばなかった。

中国人マッサージについて興味を持った。ひとつめの理由として、中国人は自分としては大学院まで出て上昇したいという気持ちを持っているがブラジル人留学生はこの場合上昇したいという気持ちをもっていない。社会の下部からはい出せないのは本人の性格や人柄にそもその問題点があると感じられる。この場合の中国人は上昇したいという気持ちがあるが環境的にどうしようもないと感じられる。二つめの理由としては中国人は頭がいいにもかかわらずマッサージ店で働くという決断をしている点に社会のどうしようもなさのようなものを感じ日本と中国の物価や生活レベルの違いに驚いたからである。実際自分も中国人の客引きが新宿などで声掛けを行っているのを見たことがあるがそのような人たちが大学院をでているような人々だという認識ができたのでこれからは見る目が変わると思う。ブラジル人留学生も輝かしい一部の選手以外は

日本に来て職がなくなるということはあるわけで難しい問題だとは思いますが、それが理由で社会の下部に落ちる人間が多いとも思えない。今回のルポは彼個人の問題が大きいような気がしたのも中国人マッサージに比べてそこまで興味をそそられなかったのではないだろうか。

私は「中国マッサージ」に関する記事に興味を持った。まず、「中国マッサージ」の中身についての言及が挙げられる。私が使っている最寄り駅の近くにも、夜になると若いアジア系の女性が客引きをしているマッサージ店がある。看板こそマッサージ店のその体裁をとっているものの、客引きや、路地裏という立地から、違法とはいかないまでも、健全だというような印象も受けなかった。私自身こうした意識を前提的に抱いていたので、筆者が言及している「中国エステ」と「単純なマッサージ」との違い、また、「中国エステ」における「健全点」/「風俗エステ」という違いには、非常に納得させられた。次に、「豊かで幸せな生活」を求めるために「中国エステ」の世界へと身を投じたチェ・ホアの生き方が挙げられる。「豊かで幸せな生活」のために「中国エステ」を始め、「カネの奴隷」と化して生きているチェ・ホアは、一見すると非常に矛盾しているようにも感じられる。先述した筆者の言及のように、「中国エステ」というのは「単純なマッサージ」とは違うし、中には違法に「風俗エステ」として経営している店もある。そうした点を踏まえると、「中国エステ」はどちらかという下世話な職業に類されるものである。そうした職業は社会的な地位は低い(少なくともそう認識されている)。そのため、仮にチェ・ホアが「豊かで幸せな生活」を送っていると感じているとしても、それは個人的な感情に過ぎない。つまり、社会的なレベルで真の意味で「豊かで幸せな生活」を送っているかという、必ずしもそうとは言い切れないだろう。例えば、大手企業で成功している者と小さな「中国エステ」で成功している者の優劣を比べてみるならば、それは世間的な認識からして一目瞭然とも言える。しかし、ここで考える必要があるのは、日本社会は果たして真の意味で「豊かで幸せな生活」をしているのかどうかということである。確かに、日本は経済的な豊かさの面ではアジアに止まらず世界の中でも有数の高水準であることは言うまでもない。だが、かといって「中国エステ」のように、下世話な職業と見なされることの多いものが無いかというと、決してそうではない。一例として、AV女優が挙げられるだろう。日本のAV産業は世界一と言える大規模なものである。それ故AV女優は、豊かさを求めるにあたっての一選択肢として考え得ることも大いに可能だと言える。しかし、世間的な認識を基準にすればAV女優は確実に下世話な職業と見なされる。実際、あるAV女優が自身のツイッターで、AV女優をやっているというだけで誹謗中傷を受けるという事例もあった。仮にAV女優として大きく成功して豊かになったとしても、そしてそれが幸せであると感じたとしても、それはあくまでも個人的なレベルでの意識でしかなく、広く社会的な意味で「豊かで幸せな生活」だとは言いがたいのではないか。「中国エステ」の事例を通して、筆者が最後に述べているように、「豊かで幸せな生活」のために「カネの奴隷」と化しているという事実が日本で生まれ育った者の中にも確実に存在している、ということを再認識させられた。同時に、日本は「豊かであること」のみが過度に強調されすぎているのではないかと感じた。

中国人マッサージ。(この感想は非公開で御願います)

理由、びっくりしたのはトリリンガルで日本語もできるのに、なぜマッサージ屋で働き始めたのか？たしかに「性」に関するビジネスは儲かるが、日本に来た目的はなんだったのかな？と感じた。

私の知り合いにエロネットチャット店を経営して荒稼ぎしている人がいて、その店の女の子とも飲んだ事はあるが、その子たちはおせじにも「学歴」は高くなかった。日本はまだ学歴社会であり、今回登場した中国人女性は学識は高かったし、観光産業に従事すればもっと安定した食に付けたのではないだろうか？と想ってしまう。

確かに中国人マッサージと聞くと、ちょっと限りなくブラックのグレーであると印象を私は持つてしまうのであるが、その原因はなんなのか、ちょっと気になった。テレビで犯罪 24 時的なものの影響なのかなと感じたり、でもこうゆうなんでグレーな印象を抱いているかを突き詰めてみると、面白い、新たな発見が現れるかもしれない。

外国人が憧れる日本、その日本に住んでも埋まらない心を抱えている外国人がいることを覚えておかなければならないのであろうと想った。

理由 2。

街に繰り出せば必ずいる、存在していると言っても過言ではない中国人マッサージ店には私は言った事はないが、そこで中国人がなぜ風俗系のお店で働く様になったのか、なぜその産業でなければならないのかについて単純に（好奇心かもしれないが）興味を持った。

自らの選択によって、人生は大きく変化する。「中国マッサージ」、「ブラジル人サッカー留学生」の記事を読み、最も興味を抱いたのは中国エステのママとして働くチェ・ホアの生き方だった。彼女が「表向きは性的サービス禁止をうたう健全店」に強いこだわりを持っていること。そして、「中国マッサージ」の記事からマルセル・デュシャンを思い出したこと。その二つが関心を抱いた理由である。

健全店と、完全に違法である「風俗エステ」。この業界について詳しくない人々からすれば、二つの店は何ら変わりのないものである。したがって、チェ・ホアの店で起きた事件のように、客は健全店であっても違法店と同じサービスを求める。さらにその外側の人々からすれば、「中国マッサージ」と聞くだけで近づきたくない、卑猥なものだと感じるかもしれない。これだけの見方でも、何層にもグレーゾーンは重なっている。何本もの補助線が引かれている。

一方で、マルセル・デュシャンは、「芸術」という中に敷かれた境界線を飛び越えてしまった。美術館に便器『泉』を置くという、一見「悪」と捉えられる作品で。

デュシャンは、『泉』が美術館から排除されたことに対して、ダダイスト機関誌 **The Blind Man** 第



2号（1917年5月刊）に抗議文を提出した。以下引用である。

リチャード・マット事件。

六ドルの出品料をはらった作品はだれでも出品できるという。リチャード・マット氏は「泉」をひとつおくれた。この品物はまちががなく消え去り、こもりんざい陳列されなかった。

マット氏の「泉」を拒否する根拠はなんであったか。

（1） ある連中はそれが不道徳で卑俗だと主張した。

（2） またある連中は、それが剽窃である——つまり、たんなる衛生器具屋の器具にすぎぬ、と主張した。

さて、マット氏の「泉」は不道徳ではない。浴槽が不道徳でないように。それは衛生器具屋のショウ・ウィンドーで毎日見ることのできる品物である。

マット氏が「泉」を自分の手で作ったか否か、はたいて重要なことではない。かれがそれを選んだのである。（訳文は西村清和『現代アートの哲学』1995による）

デュシャンの『泉』が賛否両論であることは、理解できる。そのときの美術界では、あまりにも革新的な主張でもあり、ただの便器に名前を書いただけでもある。しかし、抗議文にもあるように、否定する根拠は何であるか。それが不道徳だからか、卑俗だからか、単なる器具にすぎないからか。「中国マッサージ」にも同じことが言えるだろう。チェ・ホアはプライドを持っている。金稼ぎかもしれない、日本に在留したいだけかもしれない、そんな理由はいくらでも定義できる。否定するのは簡単だが、彼女はどんなに問題が起きて、健全店として営業しているのだ。

現代社会が「色のグラデーション」をつくったか否かは、重要なことではないのかもしれない。そのグラデーションの中で生きるそれぞれが、「それ」を選んでいることこそ、私たちが見つめていくべきリアルなのだろう。

「中国マッサージ」の話に興味を持った。海外から日本にやってきた人にとって、「豊かで幸せな生活」をするのは日本人よりも難しいのだと思った。その一つの理由がビザである。彼女が事業を展開しようとしたのもおそらくビザを手取り早く取れる、というのが大きな理由であるような印象を受けた。ビザのために「偽装結婚」までしなくては行けない事態である。大学院卒でトリリンガルという優秀であろう人材が、ビザのために翻弄されてしまうのはもったいないと思った。今後、外国人が日本にやってきて活躍する機会はたくさんあるだろうし、そうするためにもビザの取得基準の見直しをやるべき段階にあるではないか。

また、彼女はカネの奴隷だという表現があるが、これが「生きる」ことなのだと捉えることも出来たのではないだろうか。確かに年中無休で仕事を続けて、外からの摘発など様々なトラブルもあり、大変な仕事ではあると思う。だが、学生時代に「中国マッサージ」をやっていた時の経験を読むと、そんなに否定的な印象は見受けられない。彼女が目指していた「安定」とはだいぶ違うものにはなってしまったが、自分で経営して、スタッフを養っていくという「自立」は果たしている。それはそれでたくましい「生き方」である。

私は「中国マッサージ」の記事の方に興味を持った。

一点目の理由は大学に入ったもののやりたいことが見つからず、とりあえずバイトに夢中になっていたら就職の時期になってしまったというチェ・ホアさんの学生時代の話が、今の私と重なっていて共感が持てたからである。これは私の実感だけではなく、同級生の様子を見ていると学業やサークルよりもバイトに精を出している学生は多い。もちろんホアさんの場合と日本の学生の場合ではバックグラウンドがだいぶ異なるので、表面的な現象がたまたま一致しているだけで全く別の動機に支えられているのかもしれないが、日本人の学生が読んでも共感できる人が多いのではないかと想像する。

二点目は、彼女は非常に知的であり、それをビジネスにも生かしていることは伝わってくるのだが、他方で彼女の生き方が少しアンバランスなのではないかというのも感じざるをえなかった。例えばさらっとお客さんと子どもを作ってしまったたり、家を買ってローンを組んで自分を追い込んでしまっている。また、日本語検定の取得のために仕事の後も欠かさず勉強をしているとのことだが、日本語検定は果たしてそこまでして取得するメリットのある資格なのだろうかというのも引っかかる。法律の問題に関して、近くに法律に詳しいアドバイザーがいれば、何か上手い方法があったりするのではないかという気もする。全体的に努力の何割かが空回りしてしまっているような印象を受けるのである。この原因を考えてみると、彼女は中国でも日本でもマイノリティなので、適切な情報を提供してくれるようなネットワークが周りにないのではないかというのは仮説として考えられるのではないかと思う。そしてこの仮説がある程度あたっているとすると、この辺りも普遍性のある問題なので誰が読んでも割と共感できるのではないかと思う。現代ではますます人々のネットワークが重要になっており、豊かなネットワークを築けていないと、いくら高学歴であったり専門技術があったりしても、難しい人生を送ることになりやすい。従って、学歴や能力の割に仕事が順調に行っていないというギャップに悩んでいる労働者の人や、自分も含めて学歴や専門技術だけでは生きていくのは厳しいという世の中の流れを感じている学生にとっては、共感しやすい記事なのではないかと感じた。

私は、中国マッサージの記事に興味を持った。理由は、まず個人的なものとして、私の家の最寄駅近くにはその手の風俗店あるいはその類似店が数多く存在するから、というものである。しかし、よくよく考えてみると私は常々それらの店を「風俗店」つまり性的なサービスを行う店だと一括りにしてしまっていた。怪しげなネオン、周囲を固める如何にもな服装の客引き、階段奥などに構えられた見えない店先……こういった「外形」は如何にもアヤシいためすぐに「風俗」と決めつけてしまう。しかし、チェ・ホアのような健全店はその「アヤシイ」という我々の固定観念から「性的サービス」を受ける店だと一般の人は勘違いするのだろうし、利用客もそのような期待を持ってしまうのだろう。ここに、セックスワーカーとそれ以外の業種を一括りに「アヤシイ」と感じる人々の心性を感じた。もう一つの理由は、もはや様々なところ(牛丼屋やコンビニなど)で外人を見かけよくも悪くもグローバル化を感じる一方で、このような外国人による「夜の仕事」は昔からあるにも関わらずむしろ「ローカル」な形を露呈していることである。それは多種多様な風俗文化が花開いたというよりも、日本人に合ったサービスを提供するという外国人(特に経済的格差の大きいアジア系の人々)の方が多い。これではまるで風俗のアウトソーシング

と言っても差し支えない。こうした日本の「グローカル」な状況がブラジル人サッカー留学生の記事よりもより濃く表れていることが、興味を持った二つ目の理由である。

中国エステの問題により興味を持った。他の日本の風俗店同様に、現代日本のインターネットや規制の風潮の基で「漂白」に苦しむこれらの店舗の問題と、さらにビザの問題についても興味を持った。

インターネットによるロコミなどの漂白が風俗経営を浄化し、「あつてはならぬもの」の存在を圧迫していることは売春島の頁で触れられていたので、詳細は割愛したい。このような「あつたはならぬもの」の漂白とアンダーグラウンド化は必ずしも良いものではないと私は考える。

ビザや移民も問題についても深い検討が必要だと思う。現代の日本社会、特に安倍政権は移民に対する厳しい政策を取っている。今回のエステのケースも、自分では選べないこと（ナショナルリティー、民族、生まれなど）によって不当に生活に重荷を抱えさせられる健気な中国人が印象的であった。筆者も触れていたが、大学、企業などの側面でビザの問題などに苦しめられる。また、本文では断定されていないが、中国人が経営するエステ故に、クレームや嫌がらせをする人々が少数とは言えども、いないと否定することはできないだろう。経済や政治のしわ寄せは移民に降り掛かることはフランスにおけるロマの人々の状況を見れば一目瞭然である。このような移民の問題に目を瞑ること無く議論する必要があると考える。

私が興味を持ったのは「中国マッサージ」の話題である。「中国マッサージ」は外国人女性の、「サッカー留学生」は外国人男性の話であるが、この二つには大きな差があると感じた。中国マッサージの女性は学歴もあり企業に勤めた経験もあり、比較的エリートであるといえる。一方、ブラジル人男性は生まれも育ちもあまり良くない、素行も良いとは言えない青年であるという差が興味深かった。中国人女性は祖国や日本でいろいろな種類のトラブルや失敗に見舞われつつも、常に失敗を生かしてその時々で最善な行動を取ろうとしていた。一方、ブラジル人男性はすぐ酒や金でトラブルを起こし、同じ失敗を繰り返していると読めた。この差は男性・女性の性差以前に根深い問題である。自分自身のコントロールができない、というのは社会生活を送る上で大きな損害になる。金や酒や異性によるトラブルを起こしやすいというのはある意味どうしようもなく、同情こそすれ非難すべき問題である。一方、中国人女性にも同様のトラブルがあったが何とか乗り越え、比較的しっかりとした生活を送ることができている。この差が面白いと感じた。一方で、その中国人女性が親密に関わった男性の中にも、アルコール中毒などといった酒や金によって失敗した男性の描写があったのも興味深かった。もちろん女性の場合もないわけではないだろうが、「酒ばかり飲んでいて失敗する」人では男性が圧倒的に多いのはいったいどうしてだろうかと思いついた

街で普通に生活している外国人はどのような理由で日本で暮らし、どのような思いを持っているのかという疑問を普段ではほとんど意識もしていなかった。それは外国人に限ったことではなく、日本人に対しても同じであり、個人の問題以外に関心が薄れ、地縁・血縁的な関係が希薄になっている日常を振り返ることができた。

記事で取り上げられていた 2 人の外国人にはそれぞれに生い立ちがあり、様々な逆境が立ちだかっている。それらを考えた上で中国マッサージの方により興味を持った。その理由の一つは彼女の就職の失敗がある。どれだけ高学歴であっても就職に失敗し、歯車が狂い、再起が難しいということは日本が現在抱える就職難やニートの問題と結びつくと感じた。もちろん彼女が日本で就職に失敗したのには外国人であるという理由もあるが、いつ何に躓くかわからない状況は日本人にも日本に住む外国人にも同じであると思う。

また、両者の日本に住んだ結果が二つ目の理由である。描いていた理想と現実がずれ、目の前の日常に埋れていってしまうことに対してどのように考え、その先を進んでいくかが両者は大きく違っていたが、共に裏の世界に行き着いたことが共通していた。一方はビザの期限に苦しみ、他方にはその問題はないが、ブラジル人男性は機会を活かすことができなかつたように、様々な障害、リスクをいかに乗り越えたかが対比されていて興味深かった。

「中国マッサージ」の記事に関心を持ちました。その理由の一つは中国にホームステイ・旅行をして、この記事のチェ・ホアの故郷ほどではないが貧しい生活をしている人々を見てきたこと。二つ目は豊かさを求めた結果、大学院を出てからマッサージ店という選択肢にたどり着き、そこで一定の満足を得ているということが自分の常識から見たときに驚きであったということである。

貧しい生活をしてきて、中国での仕事も満足するものが得られなかつたときに語学力を生かして日本に来ることは自分でも想像のつくことであつた。しかし留学して大学院を卒業しながらその後の展望というものを持たず、またそれを真剣に考えずに就職活動に入るというのはあまり想像できないことであつた。そうした状況の人の受け皿として中国マッサージ店があり、そこには漠然と求めていた豊かな暮らしがあることもまた想定外だつた。マッサージは生活のためにしかたなく、ギリギリの状況で続ける仕事であると思つていた。そして求めていた「豊かな生活」に入ると同時に自ら「金の奴隷」と言うような状況に入っていくことの皮肉も感じました。

一方で今回のテーマはあまり自分の生活に関連しないうえに、3回目までの文章と違って何かこれによって問題意識を掻き立てられるようなものではなかつたように思います。興味深いけれども遠い世界のような感じを受けました。自分の読み方の問題かとも思いますが、もっと日本人の生活に引き寄せて書いていただけるとそういったことがより理解できたように思います。

この記事に興味を持った主な理由は、「中国人マッサージ」のなかの「健全店」を中心としたコミュニティの親密性です。偏見でしなかつたようですが、こういう界限はもっと排他的でシステムチックなものだと思つてました。貧しい人が共生するコミュニティでは親密な関係が形成される印象がありましたが、常連になっていくことで客だつた人が参加するという「その先」のケースもあるというのが興味深かつたです。脱童貞失敗談の「大事なもので捨ててきてしまった」という話をよく耳にするのは、一般的な(?)風俗が生産性を重視して親密さを失っているということなのでしょう。そういったところにさびしさを覚えた人が「中国人マッサージ」に出会

うとハマっていくのも納得です。

もう一つの理由は、この記事の描く野心的な女性像が泥臭いながらもカッコいいと思わされたからです。共産党関係者を踏み台に豊かさを求めて日本にやってきて、「中国人マッサージ」の経営によってなんとかソフト・ランディングを収めたという彼女の物語自体が十分に面白かったです。トラブル続きのところをやり繰りしてこられた才覚と、豊かな生活を手にしたいという野心に心を打たれました。

興味を持った記事：中国マッサージ

性風俗に関することは、気になってはいたけれども、進んで自分からは調べようと思わなかったテーマだ。それだけに、今回の課題文は深く印象に残っている。

ひとつ目の理由は「カネの奴隷」というキーワードにピンと来たからだ。チェ・ホアは、稼ぐことばかりを考えて、カネの奴隷になっていると語っている。そこで思い出したのは、東日本大震災の時に大きく取り上げられた、石原慎太郎元東京都知事の発言だ。氏は震災時「津波で強欲を洗い流したらいい」といったことを発言し、大きな話題を呼んだ。これを聞いたとき、私は福島出身であり、さすがに言い過ぎだろうと思った。しかし冷静になって考えてみると、言い方に問題はあれ、日本人のこれまでの生き方を見直すきっかけとなったことには間違いないと思うようになった。カネを稼ぐために働くはずが、いつしかカネに働かされている現実は、悲しいものだった。

2つ目の理由は、自分の2つの記事を読むことで、自分のエゴを思い知らされた思いがしたからだ。「ブラジル人サッカー留学生」の記事の終わりには、耳の痛い言葉がつつつてある。「あつてはならぬもの」は、すでに、そして常に存在してきたものに他ならない。しかし、私たちはその姿を見つめようとせず、また、そもそも、存在そのものを忘れてはいなかっただろうか。これまでを振り返ってみると、私自身、自分の生活や目の前にあるタスクばかりに気を取られ、「あつてはならぬもの」から目を背け続けてきたように思う。正確に言えば、「あつてはならぬもの」が目に飛び込んで来ても、それをただ「いやなもの」として自分から遠ざけようとしていた。「何かがおかしい、これが気になる」と感じる感覚を磨くこと、そして自分自身と重ね合わせて考える努力をしないといけないと感じた。

二つの記事を読んでみて、私は「ブラジル人サッカー留学生」の記事に対して興味を持った。理由のひとつとして、「クリスチャン・カルロスの実父がアルコール依存症でつらい目にあつたとわかっているのに、なぜ高校で隠れて酒を飲むようになったのだろうか？」と疑問に思ったからである。子どもの頃には酒が原因で父親と離ればなれになり、日本に来てからはいつも酒で失敗しているのに、なぜ飲むことをやめられないのだろうか。サッカーで夢を掴むチャンスさえも酒で失っていて、クリスチャンにとって酒は忌避すべきものなはずである。そのような酒に飲む価値があるのだろうか。また、ふたつめの理由として、酒で失敗を繰り返すクリスチャンの居場所となったのが、水商売の現場であるということがとても皮肉に感じたからである。そして、クリス

チャン本人もこの世界で成功してやると意気込んで、「酒の世界」の世界に対して負の感情を抱いていないようにも見えた。もしかすると、それは「酒からは逃れられないのだから、せめて足掻いてやる」という思いの裏返しなのかもしれない。彼のような正道から外れてしまった外国人を受け入れるものとして、周縁的な夜の街が機能しているということがこの記事によって再認識させられた。

本講義ではしばし「エピソードの中心人物が背負う社会的不条理は不可抗な側面のみならず、自らが招いた側面も認められるのではないか」という「自己責任論」が叫ばれてきた。おそらく今回のふたつの記事は今までと比してもっともその意見が先行する内容ではないだろうか。そのうえで、私はブラジル人サッカー留学生の記事に興味を持った。端的に言って、クリスチャンの生き様、及びそれが招く悲劇的な出来事にはおおよそ同情の余地がない。彼の「大言壮語な姿勢を見せつつ大事なことから目を避ける」という性分に彼が生きてきた社会的コンテクストはいかほどに寄与しているのだろうか。参照例が乱暴かもしれないが、日本人にもオリンピックで金メダルを取りながら、わいせつ行為によってその名誉を溝に捨てるような人もいる。ここで語られるエピソードには「セバスチャンがブラジル人であるからゆえ背負った何か」が明瞭ではない。一方で、中国マッサージのエピソードには少なからずその側面が確認できる。ただし、このエピソードでより関心が向く箇所は「漂白された中国人マッサージの実態」よりも「日本における中国人の就職率とその実態」であったり「日本における中国人の起業やその成功可否」であったり、ひいては「チェ・ホアはなぜそこまで日本で成功にこだわったのか」というポイントであったりする。どちらも出自に由来するハンデを背負った外国人のエピソード、という風に一見して思われる。しかし、セバスチャンのエピソードにはその側面が弱いように感じられたこと、チェ・ホアのエピソードはもっと言及すべき箇所があるように思えたこと、以上二点が逆説的に前者への関心を強くさせた理由だ。

今回の記事はどちらも、「社会的な成功のルールに乗ったように見えるひとの実情」についてのものだったように見える。留学して大学院まで卒業した女性と、高校サッカーでヒーローになり得た男性。わたしがより関心を持ったのは前者の女性に対してである。現代社会に生きる人は皆、どのような生活環境にあるひとでも、多かれ少なかれ、「将来の理想の生活のために、今は頑張る・我慢をする」という意識のもと暮らしているように感じられるが、その意識が染みついて生き方にまでなってしまった、というのが彼女のケースだと思う。彼女自身が言うように、彼女は今このとき幸せになることを忘れてしまっているように見える。刹那的に生きることを奨励するわけではないが、「今このとき」の幸福も人生において重要なものだろう。現代人のあたらしい「幸福」にまつわる問題が彼女のケーススタディに強く現れていると思った。また、実務経験もある彼女のように「優秀」な女性が就職活動に失敗した、という点についても疑問に思った。就職活動のシステムティックさによく適応できなかったのか、彼女のような人材が求められるところへうまく向かっていけなかったのか、あるいは日本社会に無意識下に残っている日本人以外に対する差別がはたらいてしまったのか。彼女が就職活動に失敗したことそのものにも、そのあ

とはいあがれずにいることにも、不条理を感じずにはいられなかった。

わたしは中国人マッサージに関しての記事に興味を持った。その理由の一つとして、彼女が健全店にこだわっていたというものがある。性的サービスのある店の方が儲けはよくはなるが摘発の恐れもあるので『抜き』はしないと彼女は語っているが、果たして理由はそれだけなのだろうか。歌舞伎町をはじめとしたそういった店の乱立する繁華街ならいざ知らず、彼女が店を構えるようなベッドタウンではよほどのことがない限り警察が自主的に動いて摘発する、という可能性は低いだろう。わたしがこの記事を読んで感じたのは、彼女の性的サービスなしでお客を通わせているということへのプライドである。そして、良いか悪いかは別として店の経営者がそうしたプライドを持っていることでそれに感化され、彼女と同じような道を辿るスタッフも少なからず出てくるだろう。

また、彼女のような在日中国人に限らず『お金を稼がなければ』という強迫概念にかられている学生が多くいるということもわたしがこの記事に興味を持った理由である。特にお金に困っていないくとも、アルバイトをするようになりある一定以上の額を稼ぐようになるとその額を超えないと思ひ込みお金を稼ぐことに囚われる人は少なくない。

2つの記事を読んで、中国エステ経営者の話により興味を持った。理由は大きくわけて2つある。

1つは、自分との「近さ」だ。女性で、大学院を卒業し、異国である日本での就職を目指していた彼女は、現在こうして大学に在籍し、自分にとって異国のようにも感じる東京での就職を望む自分と重なる。今はおそらく「漂白する」側に無意識に立っている自分でも、何かのはずみで彼女のように「漂白」されながら生きることにならないとも限らない、そう考えた。

記事には、彼女が現在の状況に至った決定的な要素は書かれていない。ただ、彼女が語る「豊かで幸せな生活」を目指していた、という具体性を伴わない言葉が繰り返されるばかりである。強いていうならば、実家が貧しく自らで稼がねばならないという強迫観念にとらわれていたことが原因としてあげられるかもしれない。だが、これが引き金だと言えるような決定的な出来事などないのだろう。だからこそ、「あつてはならぬもの」の薄気味悪さ（こう感じることも自分が「漂白」を誘発しているのだろうが）が余計にこちらの記事からは感じられた。

もう1つは、「学歴」「能力」に関する問題を想起したことだ。ブラジル人サッカー留学生の記事では、サッカーの能力と人なつつこさという天賦の才を持ちながら、アルコール依存症によってチャンスを自ら潰してしまうという、ある種自業自得にも帰結できてしまうような、わかりやすい構造が描かれている。

ところが中国エステ経営者の記事では、話は真逆になる。彼女の語学に代表される才能は、彼女自身の努力によって磨かれた部分も少なからずあるだろう。しかしそうした才能や、中国の国家重点大学を卒業後に日本の修士課程を修了したという学歴があっても、日本での就職は叶わなかったのだ。

彼女自身は、「やりたいことが明確でなかった」と就職失敗の理由を語っているが、今時、や

りたいことを明確にして就職活動に臨む人間が、いったいどれだけいることだろう。大半の人間が、彼女と同じく「安定」を求めているだけなのではないだろうか。少なくとも自分の周りにいる人を見る限り、そう思わざるを得ない。

皆と同じように安定を求め、皆と同じかそれ以上の能力・学歴を持ちながら、なぜ彼女は就職できなかったのだろうか。学歴社会は終焉を迎えて、個人評価の時代に入ったということなのか。確かに、大学受験においてセンター試験を廃止し、人格を重視する、というような流れもここ最近で生まれつつある。

しかし一方では、就職活動において、まずエントリーする学生の大学名を見て絞り込む、という話も後を絶たない。インターネット上の説明会申し込みフォームに入力した大学名によって、あるライン以下の大学の学生には、実際の申し込み人数に関わらず落選・満席通知を送る、などという話も聞いたことがある。

一人の中国人の話から、現代の日本において、「学歴」「能力」といったものはどのように評価されているのか、という問題を感じた。彼女はそれを持ちながらエステの世界に身をおくことになったが、逆にそれらを持たずしていわゆる「表」の社会でのし上がっている人間もおそらくいるだろう。一つだけ言えるのは、「学歴」「能力」がどう評価されるにせよ、それらが不確かなものである、ということだけなのかも知れない。

私は「ブラジル人サッカー留学生」の記事により興味を持った。理由の一つは、このブラジル人青年の事例は、私自身も含め、日本の若者との共通点があると感じたためである。それは、地道に「身近な現実」と向き合い続けることができないことと、自分の手で「幸せの物語」に幕を下ろしてしまう、ということである。前者の例としては、「自分を評価してくれない」「ほんとうにやりたいことができない」と、就職してもすぐ会社をやめてしまう若者が考えられる。

もう一つは、水商売がブラジル人青年の居場所となり、何度もチャンスを与えた、ということに驚いたためである。水商売の世界について、わたしはほとんど知らないが、普通の企業と比べ不安定であり、殺伐とした競争社会であるというイメージを持っていた。しかし、本記事を読み、そのイメージは間違っていることに気づいた。人とのつながりを作ることができ、場合によっては今の地位より上に引き上げてもらえる。一方で、人間関係が嫌になれば逃げることもできる。本記事で取り上げられたブラジル人青年には、水商売の世界が合っていたのかもしれない。

今回、2つの記事で取り上げられた在日外国人の事例は、これまで講義で扱った事例とは異なると考える。あつてはならぬものが「漂白」されることによって、不可視化される、ということがその他の事例で見られるのに対して、今回は「漂白」され切っていないのにも関わらず、不可視化されているのではないだろうか。本ルポルタージュは、二人の外国人の生活を追うことによって見えにくい現実を明らかにしている。

しかし、本文の事例が在日外国人の問題として、はたして適切であるのか、私は疑問を持った。なぜなら、どちらの事例も日本人が陥る可能性があるからである。家庭環境が良くないことも、酒で失敗することも、高学歴を持つ人が水商売に転じることも、日本人でもありえることである。



また「中国エステのママ」はマイホームを手に入れている。激安シェアハウスに住む日本人に比べても経済的に余裕があるのは明らかだ。従って、在日外国人の問題を考えるならば、外国人であるがゆえに存在する、日本人との小さな差異を検証すべきではないだろうか。(910字)

サッカーが好きです。エステよりも身近なものであることで、記事の内容もすんなり入ってきたことが、興味を持った何よりの証明かと思います。ポテンシャルは周りを凌ぐほどのものを持っていながら、破滅の道、そのループを抜け出せなかった、ブラジル人サッカー留学生・クリスチャン。彼の記事で最も興味深かったのは、酒との関係です。「酒は飲んでも、飲まれるな」とはよく言ったものですが、まさしくその典型例。というような軽い話では済むことではありません。酒が脱法ドラッグのように感じられました。酒は楽しむために飲むもの、クライスの事件などもあり、近づいたと言えそうですが、怖いものと言うイメージはいまだ薄いように感じます。しかしクリスチャンの例を見ると、酒が人の人生を狂わせるものに充分であることを思い知らされました。さらに、興味深かった点は題名のサッカーです。前述のポテンシャルもサッカーに通じますが、基本的には人格の部分です。それにより、水商売の分野でうまく生きていた期間もあります。読んでいてサッカーの要素が少ないように感じました。ブラジルから出てきたときも家族の問題ですし、続けていたと言われた件も結局は、酒に溺れた前段のように語られました。なぜ、サッカーを冠したのか。ある種記事対象者の思いが乗り移ったのかなと思います。記事ではあまり描かれなくても、クリスチャンの人格形成の面でサッカーは欠かせないものなのでしょう。

中国マッサージの話に興味を持った。チェ・ホア氏は飯田橋の中国エステのお店での経験を楽しかった、また多くを学んだと述べている。お店は健全店であったが、彼女自身性的サービスの有無を聞いてしまうほどいかがわしい雰囲気があったと思われる。その中でも、「日本らしさ」があったという点が興味をもったひとつの理由である。ここでいう日本らしさというのはサービスの細やかさだ。お客様を相手にする仕事である以上、言葉は丁寧にお客様を敬うのは日本人の心であると思う。日本で外国人が開業する際、まずこの点に留意しなければいけないと思う。以下の例は、アパレルショップでアルバイトをする私の実体験である。海外ではファッションブランドで服をたたまずに紙袋に入れるのは当然だが(韓国では袋もくれない)日本ではわざわざお客様を待たせてまで服をたたむ。畳まれている服を見て不快感を覚える人はまずいないだろう。このトピックに興味をもったふたつめの理由が、中国エステなどといったグレーゾーンのお店はなぜなくなるのか、ということである。第10回の最後に書かれていたように、中国エステに足を運ぶ男性の心理はわかった。お客様があつてこそその商売であるので、彼らの心理は大切な条件である。もうひとつ必要な条件は働き手であると思う。チェ・ホア氏のように「豊かな暮らし」を求めて日本に来る中国人は、中国が先進国の仲間入りをしたと言われる現在でもいるだろう。彼女たちの豊かな暮らしに必要なのはお金である。1番目に見える形、それが重要なのではないかと思った。

私は「中国マッサージ」の記事に興味を持ったのは、この記事から外国人留学生の光と闇が垣間見ることができ、なおかつその背景にある理不尽な日本社会にも疑問が生じたからである。高田

馬場を歩いていると、いたるところから日本語ではない言語が聞こえてくる。時には帰国子女のような出で立ちのアメリカナイズされたカップルから、時にはアジア系の顔立ちをした大学生の集団から。日本の大学に通う留学生たちは、母国語はもちろん日本語を含め数ヶ国語を操ることができる。英語もろくに話せない一般の学生たちは彼らに対して羨望のまなざしを向けざるを得ない。このような優秀な外国人留学生が社会を動かし、企業から求められるのであろう。そう考えながらも彼らの将来に思いを馳せたことは実はあまりない。今回この「中国マッサージ」の記事を読んで、普段は「高学歴」や「語学堪能」などの光に隠されている外国人留学生が抱える闇を見た。日本にやってくる留学生は概して優秀な者が多い。したがってある程度明るい将来が約束されているものだと信じていた。しかし大学を卒業すると日本人の学生がそうであるように、いや日本人よりももっと理不尽な社会と直面しなければならないのである。外国人が日本で働くときに越えなければならない障壁は想像以上に多い。日本の一般企業は外国人雇用を積極的に推進している。にもかかわらず外国人の労働条件は厳しく、雇用者側にも大きな負担が強いられる。需要と供給の狭間にある理不尽なルールが将来を期待され来日した外国人の豊かな生活を妨げているのだ。

ブラジル人サッカー留学生の記事に興味を持った。初めは、スポーツ推薦で来日してきたブラジル人がけがを負ったせいでサッカーに打ち込めなくなり、苦勞しながらも懸命に生きていく話だと思って読み始めた。しかし、読み進めていくと、そうではない。主人公のクリスチャンは母親を慕って来日し、きっかけがあったから地元高校のサッカー推薦を受け、また、推薦で入学した高校は自らの問題で中退している。その後就職も、酒やお金のトラブルで長続きしない。はたしてこれは「社会」の闇といわれるような問題なのか。これまでのケースとは異なり、この記事に描かれる悲惨さはかなり個人的な問題であるように思われた。異国の地で接する、食や風習や言葉の違いは若者にとっては生きていくうえで大きな障害になると思うが、このクリスチャンのケースが「ブラジル人サッカー留学生」というテーマで議論されているのかは疑問だ。

今年開催された韓国・仁川アジア大会でネパールとパレスチナから来た男性選手4人が行方不明になったことが話題になった。途上国のスポーツ支援は薄いことから、選手としての未来がない、と考える人が失踪するケースが多らしい。ほかにも身を守るため、内線地から亡命を図る選手もいるようだ。彼らの場合、異国へ向かう切実な理由がある。

クリスチャンが「サッカー留学生」というテーマで語られる場合、彼にも「来日」しなければならない必然性がなければいけなかったのではないだろうか。

後者の記事は、サッカーが得意で容姿も端麗、加えて人も良いと一見めぐまれた境遇にありながら、生家の複雑なじじょうと、恐らくはそれに起因する酒癖の悪さによって身を持ち崩しながらも前向きに生きようとする天真爛漫なクリスチャンという一人の人物にフォーカスしている。

前者の記事は、高学歴であるのにもかかわらず中国エステを自ら経営し、様々な問題に思い悩みながらもお金のために働くことを受け入れる朝鮮系中国人女性チェ・ホアの境遇について述べら

れた記事であり、性的サービスの提供をめぐるグレーゾーンの中で漂白される彼女ら外国人労働者の有り様が浮き彫りにされていた。僕にとってはこちらの記事の方が興味深く思われた。

その理由の一つとして、これまではさほど気にかけてはこなかったが、このきじをよんでから同じような立場に恐らくはあるであろうエステ店が、身边だけでも相当数思いつくからである。そのことはとりもなおさず、法のグレーゾーンの中でひっそり佇むその怪しい磁場がのっぺりと漂白され、ただの風景と化してしまっていることを示しているように思われ、えもいわれぬ薄ら寒い思いを抱いたからである。

二つ目の理由として、そもそもチェ・ホアが中国における少数民族であり、そのためコネを第一とする中国社会でうまくやっていくことが出来ずに来日するという選択肢を取らざるを得なかったという事情である。

彼女は幸い頭も容姿も良かったので、自力で日本語を勉強し、留学生として正當に日本にやってくることもできたし、その中でエステの仕事をするときもそれなりに主体的に動くことができた。しかし一方で誰しもがそうしたものに恵まれているわけもなく、もっと黒いところへーそれこそ違法入国後に女衞の囲い者となり、売春を日々繰り返し、かといってそこ以外にあてもなく、警察に訴えるなどもってのほかであるので諾々と従っているうちにボロボロになった体だけが残され、路地裏に打ち捨てられて果ててしまうような人も多くあるはずである。違法となる性的サービスを提供する店に勤める女性の中にはこういう境遇にある人が無視すべからざる数に上るであろうことは考えるまでも恐らくはないことであろう。それにもかかわらず、我々はあまりにそうした事情に無知であり、それどころか己の快樂を充足させるために、何も考えずそうした店を利用するのである。

グレーゾーンの漂白は、明らかなブラックさえをも隠蔽する。我々は都合の良い面ばかりを見る――彼女らにもお金が必要なのだし、利害は一致している、などと、それが明らかに構造の維持を扶助するものであるのにもかかわらず、罪悪感とは程遠いところで、我々は値踏みしているのである。

資本主義社会において、こうした存在をなくすことは不可能なのだろうか？ せめて彼女らの存在を知り、そのリアリティを受け止めることは我々に最低限必要なことであろう。その上でどう振る舞うか？ ……

私は中国人マッサージの記事に興味を持った。まず興味を持った第一の理由は、私が大学で知り合った友人の中に中国人留学生が何人かいるからだ。記事に記されている中国人の姿と私がリアルに日常で感じている中国人像があまりにもかけ離れていたからだ。ここで中国という国がいかに貧富の差の激しい国かということがわかった。第二の理由は、私がこの記事の女性に少なからず同情の念を覚えたからである。彼女の言う「幸せ」は中国エステで稼いで日本でなんとか暮らしていけるほどのお金を稼ぐことではなかっただろうと思う。自国より裕福な国へ来て勉強をして、まともな企業に就職し、自分の能力で能力に見合ったお金を稼ぐことだっただろうと思う。しかし、現実問題、外国人が日本でそのような地位に就くことは余程の卓越した能力が無くては無理だろう。私は日本に生まれ、彼女は中国に生まれただけでこんなにも人生のスタートライン

が異なると思うと心が痛む。私の中国人の留学生の友達にしても同じである。お金があるという理由で留学生として恵まれた環境で様々なことを学び、自国や日本で大手企業に就職する。この差は埋められないのだろうか。意欲や才能のある人間が必ず報われる社会は成り立たないのだろうか。仕方がないことだとは感じていてもマッサージ店でお金を稼ぎ、その生活に満足してしまっている彼女には残念でならない。

早稲田大学には非常に多くの留学生がいるが、彼らは正式な存在に思える。一方でブラジル人サッカー留学生のクリスチャンは、イレギュラーな留学生に思える。同じ留学生という言葉でも、これほどその様相が違うのは面白い。留学生といえば、裕福な家庭から送り出されるものというイメージがあったが、その限りではないことが面白い。これがこの記事に興味を持った一つ目の理由である。もうひとつの理由として、クリスチャンが日本にやってきた事情が挙げられる。母親が恋しいからという理由は、とても共感できた。クリスチャンは容姿端麗で、語学能力も高い。おまけに多くの人間を惹きつける無邪気さや独特の風格も備えている。これほどの才能があれば、まっとうに生活していれば、日本国内でも一定以上の水準の生活は過ごせるであろうに、実にもったいないように感じる。日本人でもこんなに恵まれた才覚を持っている人間は少数だろう。複雑な家庭環境や異国の地での生活、彼を悩ませる要因は多いので、仕方がないのかも知れないが、真面目に生活していれば良いのにと感じてしまう。それでもなお、日本での暮らしは安定したものにならないというのだから皮肉なものである。相当なストレスがあってもなお、自由奔放に各地を渡り歩いたり、野心を描いたりする、その豪快な生き様に憧れた。

わたしが興味を持ったのは、中国マッサージの方である。日本の闇社会の中で働く外国人という点ではどちらも変わらないが、中国マッサージの方が、日本社会により大きな影響を与えているように感じられるからだ。

どのような点にそう感じるのかというと、中国マッサージに関わる人々の特異性にある。ブラジル人サッカー留学生のクリスチャンの、酒を飲んで暴れてしまい、トラブルを起こすという状況は、程度の差こそあれ、日本人にも十分ありえることではないだろうか。こう言ってしまえば身も蓋もないが、彼はそういう性質の人間である、というひとことで片付いてしまう問題というか、言ってしまえば彼の自己責任のようにも感じられる。一方、中国マッサージは、それをしないと生きていけない中国から出稼ぎに来た人々の手段として、存在する。もちろん日本人の行うその類の店もあるが、中国からやってきた人々だからこそ、低価格で提供する、気軽に利用しやすいという側面があるはずだ。これは、確実に日本人と異なる人々に向けられた視線から出てくる影響だ。

また、中国マッサージには、合法か非合法化という問題が付きまとう。飲食店と異なり個室で物事が進むため、違法なことをしても実態をつかみにくい、また、していなくても証明しづらいという状態が、グレーな部分を助長させている。

私が興味を持ったのは中国マッサージの記事だ。日本には中国や韓国からの留学生が多い。大学で私の周りにも普通にいる。また、街に出ても居酒屋やコンビニでアルバイトをしている人、夜

になると店の客引きをしている人はアジア系の外国人で多くいる。私はそういう人々を見て、なぜ日本に留学しに来ているのだろうと思ったことが何度かある。日本にわざわざ来るだけの理由はどこにあるのだろうか。この記事を読んで最初に、その疑問に対する答えはやっぱりお金なのだと感じた。自分の国で働くよりも日本に出たほうがより良い給料がもらえる。日本の企業に就職してサラリーマンとして働けば、日本人と同じくらい豊かな暮らしができる。日本人がかつて抱いていた、アメリカへの憧れのようなものだった。まず、近隣のアジア諸国にとって少なからず日本は憧れの対象になり得るのだということが興味深かった点だ。あとは、“働く”ということについて自由に考えられるのは、お金に不自由していない人の特権であるということだ。やはり、生きるために必要なお金を稼ぎたいと思っている人は、直近で手に入るお金のことをいつも考えていなければならない。それに対してその不安が小さい人は、働くことによって自分が何になりたいか、どういうことをしたいか、ひいては社会にどう関わりたいかということまで見据えて考えることができる。それができるのは当たり前ではなく、恵まれているからだと感じた。勿論その状態が崩れる可能性はいつでもある。この記事を通して“働く”ということを考える際の幅が広まったと感じられた。(661字)

今回の記事を読んだ感想として、中国の高学歴マッサージ美女も、ブラジルのサッカー留学生も、どちらも同じ海外から日本へ来日し、働くことに苦難する様子が描かれている。その行為の起因として、地元の貧困から免れて、日本で働き、豊かになりたいという思いからなるようだ。

私も、よく夜の繁華街に行けば、流暢な日本語でマッサージの勧誘をしてくる。

レストランに行けば、当たり前のように外国人がホールなりキッチンで働いている。

その風景をみて、日本で働ける事は外国人にとって良いことなんだ、豊かになる一歩なんだと、勝手に思っていた。

しかし、今回の記事を読んで、考えは一変した。

ブラジル人のサッカー留学生の記事について書こうと思う。

ブラジル人のサッカー留学生、クリスチャンは高校という若い時期から、日本に来た。

その背景には親からの期待、自身の興奮もあっただろう。

しかし、その期待とは裏腹に高校時代から暴力行為など事件を起こしてしまう。

日本に来て、活躍すること。それは果たしてクリスチャン、クリスチャンの親にとって幸せなことであったのだろうか。

この記事で描かれていたクリスチャンのように怠惰した生活を送るくらいならサンパウロにいた方が良かったのではないだろうか。

一概に、日本に来ることが良い、とは思わせないようにしてくれた記事であった。